



て拝むということとは、行き先は浄土である、仏の世界であるという安心をいただくこととなります。お釈迦さまも、親鸞聖人も、ご縁のあった方々も、私たちにとつては生老病死を生き抜いた先人、モデルなのです。親しい人の葬儀の知らせを受け取ることができないならば、その大切な場が奪われているということにもなりかねません。

（親鸞聖人が茶毘に付され涙を流す人々）

誰しも、親鸞聖人と同じように、自分の葬儀を盛大にしてほしいとは思わないでしょう。しかし、本当に私を思う人々が集う葬儀ならば、してほしいというのが本音ではないでしょうか。ある葬儀社社員の「私は、家族葬というのは、家族だけで送り出す葬儀という意味ではなく、本当に家族を中心として心を込めて出す葬儀という意味だと思っています。今までそれができていなかったことへの反省を込めた呼び方です。少人数であるか、大勢の方が弔問に訪れるかは関係ありません」との言葉が胸に残っています。

いつか終わりを迎える人生、このいのちをどのように、どこへ向かって生きていけば良いのかを伝えることができる葬儀ならば、ご縁のあった方に参列してもらいたいと思いませんか。



葬儀は確かに大変です。導師を務めていただく僧侶と日時を決定。葬儀社とは、どのような形式にするか相談し、お棺やお飾り、返礼品など必要なものを選びます。お参りしていただきたい方に案内を出し、弔問客に失礼のないように手筈を整えます。もちろん多額の費用が必要です。最も大事なはずの仏さまに手を合わす余

裕もないくらいです。

昨今、気遣いが行き過ぎて、葬儀を面倒と感じるようになってい

るのではないのでしょうか。隣近所に手伝ってもらったら、香典をいただいたら、すぐにお返ししなければならぬ。それが面倒で連絡しない、香典辞退も多くなっているようです。昔は、親戚、隣近所みんなで協力して葬儀を出していました。香典は、物入りである葬儀時の相互扶助の意味がありました。返礼が煩わしいからと香典を辞退すれば、経済的負担が増してしまいます。お返しはその機会が来た時に、できる時にすれば良かったはず。また、負担を減らすために、いわゆる家族葬を選んだものの、後になって訃報を知った人からの連絡や弔問への対応、親戚や知人からの不満も出て、精神的な負担を感じる人も少なくありません。

弔問する側は、故人、悲しみに暮れる喪主側を思い遣る心で参列するので。弔問客へ、疲れ切っている喪主が起立して礼をしなればならないのも考えものです。喪主側ができる限り仏さまのことに専念できるようにすべきです。それでこそ先に葬儀社社員が言うような、本当の意味での家族葬となるのでしょうか。

十年前頃までは、葬儀は家で行うのが当たり前でした。まずは仏間に遺体を安置して臨終勤行(枕経)、次の日の夜に親族、講中で通夜を執り行い、翌日に葬儀。火葬にして遺骨を家に持ち帰り、講中のお勤め。その翌日に僧侶を招いて初七日法要というのが一連の流れでした。今は亡くなられたら葬儀会館へ移動して、可能なら当日に通夜、翌日葬儀と初七日を勤めて、精進落としのお膳をいただく。二日間が終わらせてしまうことが増えています。内容的にも時間的にも簡素化されています。楽になって良かったと思っておられる方も多いでしょう。ただ、物理的に簡素にするのは良いのですが、心も簡素になってしまっただけでは本末転倒です。

何より葬儀は、仏さまが中心であるということ、仏さまの教えを聞く場であるということ忘れてはいけません。浄土真宗の葬儀は、浄土に往生した故人を偲びつつお念仏を称えて、私も同じ浄土に生まれ往くことを聞き開いてゆくものです。

浄土真宗では法名を授かります。浄土真宗の開祖、親鸞聖人は「釋親鸞」と名のられました。真宗門徒はみな親鸞聖人に倣って、お釈迦さまの一字「釋」を授かり、仏弟子となります。それまでのただ俗に染まっていたものから、新たに仏道の歩みが始まるということ、俗名とは異なる法名を名のるのです。本来、生前に授かるべきものですが、南無阿彌陀仏をいただきながらもその機会がなかった方には葬儀の折に授けられます。

葬儀では、法名を授かる帰敬式、仏と法と僧に帰依する帰三宝式、そして仏さまを拝する仏拝式、そのみ教えを聞く聴聞式などのお勤めがなされます。

一心寺では現在、帰三宝偈・帰敬式・讚仏偈・伽陀・表白・正信偈・重誓偈という式次第でお勤めしています。経文自体は分からなくても、そのお勤めの心を知るだけで葬儀を大切な仏事として受け取ることができるのではないのでしょうか。

全四回にわたって、葬送の歴史、先人の思い、現代の考え方などを通して葬儀について考えてきました。葬儀とはどういう意味を持つのか、葬儀の何が大切なのか見えてくる参考になればと思うことです。

### 必要のないいのちはない？

七月二十六日に起こった知的障害者施設での殺傷事件。なぜこのような凶行が、と悲しみと憤りが止まりません。紙上で、ある宗教者が「障害があるが、なかるうが、必要のないいのちはない」

と発言されました。すべてのいのちが必要である、というのは一見素晴らしい考えです。しかし、少し違和感を覚えます。いのちは「必要である」から大切なのでしょう。お釈迦さまは次のように説きます。

「すべての者は暴力におびえる。すべてのものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」  
〔ダンマパダ〕

ただ、誰もが「愛しいもの」だから大切なのです。必要か不必要かはかること自体ないのです。いのちをはかることなく（寿を量ること無く）、ともに生きていきたいものです。

「帰命無量寿如来」〔正信偈〕

### 仏教講演会報告

シンガーソングライターでもあり、僧侶でもある二階堂和美さんのライブ。スタジオジブリ作品『かくや姫の物語』の主題歌「いのちの記憶」はもちろん、女性らしく恋愛や子供のことを唄った曲。仏教に通じる植木等さんの「スーダラ節」。原爆投下から七十年経った昨年作られたいのちの尊さを訴える「伝える花」や美空ひばりさんの「一本の鉛筆」。時に軽快に、時にはしんみりとした語り口。彼女の思いがひしひし伝わってくる素晴らしいライブ、仏教講演会となりました。

「この世のすべてはどうにもならない、それでも生きる、私は生きる」（めざめの歌）。それを教え、生きる力を与えるのが仏教です。



「いまのすべては過去のすべて、必ずまた会える、懐かしい場所、いまのすべては未来の希望、必ず憶えてる、いのちの記憶で」（いのちの記憶）。まさに南無阿弥陀仏。私にはすべてが流れ込み、すべてに支えられている、だから安心、だからまた会えるのでしよう。

### 春季彼岸会報告

法話は佐々木安徳師（高松市・専光寺）。

私たちは生老病死という苦を生きていることをさまざまに川柳をあげて説明。天才バカボンのように「これでいいのだ」とすべてを受け入れて生きていければ良いのだが、そうはいかないのが人間。その苦を越えなければ救われない。苦しむ私の杖となる善き言葉が「南無阿弥陀仏」。正信偈にある「帰命無量寿如来、南無不可思議光」、慈悲と智慧が私たちに降り注いでいるということ。智慧によつて何が大事かを知らされる。私を支えるいのちのはたらきがあるということ、私は許されて生きているという慈悲の世界に目覚める。私を待っていて下さる親鸞聖人、父母、善き人がいるということ。そこに向かって善き言葉、南無阿弥陀仏に導かれて生きていきましょう。と聞かせていただきました。

### 初参式報告

小さないのちが仏の子としてすくすく育つことを願つての初参り「初参式」。

小さな子が合掌する姿は何ともいえず微笑ましいものです。



### よるしるべ二〇一六開催!

十月二十一〜二十三、二十八〜三十日、十一月三〜六日・十八〜二十一日に開催。今年も昨年よるしるべを盛り上げたアーティストがそろって登場。アートの彩られた夜の観音寺を楽しみましょう。声明・雅楽・舞楽を楽しむ「よるしらべ」は十月二十二日、十一月三〜四日です。

### 落語の中に浄土真宗?

落語の起源は仏教のお説教だつて知っていますか。安楽庵策伝というお坊さんが『醒睡笑』という本を著しました。お寺でのお説教は退屈、眠くなる。だから「睡眠を醒ます笑い」が必要ということ。これが落語のテキストになりました。

定番ネタ「寿限無」(じゅげむ)。子供の名付けの中に多くの宗教知識が盛り込まれています。「寿限無」とは「寿が限り無し」、阿弥陀さまの別名「無量寿」のことです。また「お文さん」は、船場の商人たちの熱心な浄土真宗信仰が背景になっています。「お文」というのは、浄土真宗の蓮如上人が出されたお手紙のことです。一人の人間が扮装も背景もなしに正座して語り続けるといふ世界でも例のない話芸のスタイル。それは、仏教のお説教がルーツとなつて出来上がったのです。「高座」とはお坊さんが上がつて説教していた台のこと、「(客)受ける」というのは「受け念仏」が語源です。

香川県では、生で落語を聞く機会はそのほど多くありません。今回は、落語とその背景にある浄土真宗のお話し。十月十七日十三時、高松テルサにて。講師・釈徹宗師、落語・桂坊枝師匠。「落語の中の浄土真宗」、一緒に楽しみましょう。

